

中国に行つて古い薬局

などで伝統中医薬をもらった方がいらつしやるかもしれない。日本の煎じ薬に比べるとかなり量が多いことに驚かれたことであろう。漢方薬の量に關しては古來定説がない。葛根湯を例に取ると、出典は『傷寒論』と

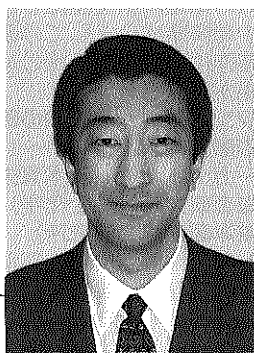
いう後漢の末ごろに書かれた本に記載されている。そこに書かれている量は葛根四両、麻黄三兩去節、桂枝二兩去皮、生姜三兩切、甘草二兩炙、芍薬二兩、大棗十二枚擘となる。律令制で決められた「兩」は現在の41.42gに相当する。これをそのまま換算すると、葛根四両は160gとな

る。しかし、現在日本で

用いられる葛根湯の葛根は4〜8gである。薬用には通常量の十分の一くらいを用いて「神農の称」と言い習わしていた。いつ頃から日本では少ない量を用いるようになったのであろうか？

江戸初期の学者、貝原益軒(1630〜1714)は有名な『養生訓』の中で、日中の薬用量の違いを以下のように分析している。

慶應大学医学部助教授



渡 辺 賢 治

漢方シリーズ

④

漢方薬の量

一つ目は、中国人は肉を食し、日本人より頑健で胃腸が丈夫だから、というのである。ただし、

それだけではこれだけの量の違いは説明できないとしてい

が少なく、多くを外国からの輸入に頼っているため、材料が高価である。やむを得ず節約して使う

くせがつき、これが定着したものだとい

さらに三つ目の理由として、日本の医師は中国の医師に比べて技術が劣る。従つて大剤を出して診断の間違つた場合に大事を招きかねない。小剤であれば仮に間違つたとしても大事には至らないし、効くのであれば長期連用によつて目的を果たせるだろうというものもある。

これらのうちで日本に生育するものもあるが、元來日本には自生しないものであったので、これらを中国の輸入に頼らなければならなかった。歴史的には朝鮮人参が貴重だった時代に竹節人参で代用したり、柴胡の代わりに前胡で代用したりした。恐らく生薬資源は貴重であり、日本で手に入りにくいものを細かく刻むことによつて抽出効率をよ

くして少ない量で効果を上げてきたものと思われる。

台湾の友人に聞いたところ、生薬はあまり刻んでいないものが渡されるが、患者が生薬の量が少ないと納得がいかず文句を言うことがあるとい

う。また日本のように長期に服用というのではなく、短期間しか服用しないためではないか、と言つていた。量に關しては、昭和に入つて先人たちも考察しているが、水の性質の違い(軟水と硬水)、刻み方の違いによる抽出効率の違いなどを挙げてい

日常診療の場では、生薬の量が少ないために効果が少ないという印象はない。薬理学的には効果と量との関係は、ベルシェイプの形を取るものが多い。量が多すぎても効果が落ちるものがある。薬理学的にも考察の余地がある。